

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593474

研究課題名(和文)薬物依存症者の回復過程 再生する依存症者とは

研究課題名(英文)Drug dependence patient's the process of recovery. What is the dependence patient who reproduce of the life.

研究代表者

五十嵐 愛子(igarashi, aiko)

創価大学・看護学部・教授

研究者番号：70334852

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：わが国の薬物乱用・薬物依存の歴史は第二次世界大戦後に始まり、今日まで三度にわたる覚せい剤乱用期がある。平成24年の覚せい剤取締法違反の検挙人員は約12,000人、大麻取締法違反の検挙人員は約1,600人あり、処方薬・市販薬・脱法ハーブなどの乱用は増加している。本研究では薬物依存症者に生育歴と薬物との出会いから現在に至るまでのエピソードを聞き取りライフストーリーとしてまとめた。総括すると、5つの過程が存在した。前兆期、発症・急性期、回復期(不安定期、ターニングポイント、安定期、社会復帰期)、終末期、再生の段階が存在し、早期発見、早期治療、継続的な治療は再生の要因となっていた。

研究成果の概要(英文)：The history of the drug abuse and the drug dependence of our country starts after World War2,and there is the period of a stimulant abuse over three degrees until today. There was about 12,000 person arrest number of men of the violation of Stimulants Control Low in 2012.The prescription drugs,the drugs on the market,and the illegal herbs abuse have been on the increase. The episode from meeting of the early developmental history and the drug to present was brought together in the drug dependence patient as a catching life story in the present study. 1)The stage of the sign period,2)Appearance of disease and the acute stage,3)Convalescence,4)End periods,5)Reproductions existed,and earlier detection,an early treatment,and continuous treatment were factors of the reproduction.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：薬物依存症者 リハビリテーション 回復支援 薬物依存症の治療 薬物乱用防止 覚せい剤 コカイン シンナー

1. 研究開始当初の背景

わが国の薬物乱用・薬物依存の歴史は第二次世界大戦後に始まり、今日まで三度にわたる覚せい剤乱用期がある。戦後「覚せい剤取締法」が制定され、今日では覚せい剤取締法違反の検挙数は減少傾向にあるが、大麻取締法違反の検挙数は毎年 1600 人以上あり、処方薬・市販薬・脱法ハーブなどの乱用が年々増加の一途を辿っている。脱法ハーブは容易に入手でき、意識障害・幻覚・妄想による交通事故・呼吸障害による救急搬送などの事例が多発している。2013 年 8 月には「第四次薬物乱用防止五か年戦略」が策定され、「薬物乱用者に対する治療・社会復帰の支援及びその家族への支援の充実強化による再乱用防止の徹底」を強化した。薬物乱用防止と再発予防の政策は整備されているが、薬物の乱用は減少せず、社会問題となっている。

2. 研究の目的

薬物問題の対策を考える上で、薬物依存症者が薬物依存からどのように問題と向き合い、苦悩しながら再生していくのか、あるいは再使用してしまうのか等その過程を明らかにできれば、国民全体の薬物問題への関心を高め、薬物乱用防止につながるといえる。

本研究の目的は、薬物依存症者が薬物依存から再生できる過程を明らかにし、有効な薬物依存対策に貢献することである。

3. 研究の方法

対象は、薬物依存症リハビリテーション施設「ダルク」の入寮者あるいは通所者である。調査する施設長に同意を得て、施設長から紹介された入寮者および通所者 28 名に半構造化インタビューを実施した。同様にアメリカ合衆国カリフォルニア州にある薬物依存症治療施設の入寮者あるいは通所者 6 名に半構造化インタビューを実施した。本研究は対象者に調査の主旨を説明し、同意を得て行った。また、所属した大学の倫理審査委員会の

承認を得た。インタビュー内容は属性、使用薬物、生い立ちから薬物との出会い、薬物使用からどのような経過をたどり今に至っているかなどである。録音した IC レコーダーから逐語録に書き起こし、分析の作業には質的分析ソフト「MAX QDA 2007 日本版」を使用した。分析は同一または類似するコードを一つの領域にまとめ、一定の時間的流れに沿ったストーリーとして文章化した。

4. 研究成果

1) 属性

日本人の対象者は 28 名、全員男性、年代は 20 代 3 名、30 代 9 名、40 代 12 名、50 代 3 名、60 代 1 名であった。最終学歴は、中学校 13 名、高等学校 9 名、短大・専門学校 5 名、大学 1 名であった。最終学歴は、平成 22 年国勢調査と比較した結果、対象者は高等教育修了の者が少なく教育年数は低かった。本人の教育の中断前後と薬物使用開始時期が関連していると考えられる。婚姻の状況は婚姻歴有 9 名、離婚歴有 8 名、婚姻歴無 19 名、配偶者有は 1 名で、婚姻歴はあるものの薬物使用による重なる逮捕・受刑による就労継続の困難、経済力の低下などで離婚していた。職業はアルバイト 1 名、ダルクスタッフあるいは研修中 16 名、無は 11 名であった。平成 22 年国勢調査の職業と比較した結果、対象者の有職率は低かった。ダルクでのスタッフ等の社会福祉に従事する者が多い。使用薬物は複数の薬物を使用している者が多く覚せい剤 20 名(20.8%)、大麻 15 名(15.6%)、有機溶剤 1 名(1.0%)、MDMA 6 名(6.3%)、ヘロイン 1 名(1.0%)、コカイン 7 名(7.3%)、シンナー 20 名(20.8%)、処方薬(向精神薬、抗不安薬、エフェドリン、睡眠薬) 12 名(12.5%)、市販薬(咳止め、睡眠薬) 4 名(4.2%)、アルコール 3 名(3.1%)、その他(マジックマッシュルーム、LSD、チョコ、リキッド、ライターガス) 7 名(7.3%)であった。逮捕歴有は 21 名で平均すると 1 名で 6

～7回の逮捕歴がある。逮捕歴無は7名、受刑歴有は15名、受刑歴無は13名である。罪名は覚せい剤所持と窃盗が多く、傷害もわずかにある。現在の状況は、ダルクと医療施設による治療中・治療後28名で、薬物使用による急性期は脱し、症状も安定し回復期にあった。ダルク入寮期間の平均は約5.8年で、入寮期間が長い者はダルクスタッフとして働いていた。薬物使用からダルク入寮期間までの平均は約9.1年である。薬物使用から初めて相談、治療を受けるまでの平均期間は7.8年であった。ダルク入寮への紹介経路は、医療機関9名、インターネット8名、刑務所7名、裁判所1名、警察1名、AA1名、知人・友人1名であった。刑務所、裁判所、警察などからの司法機関からの紹介が3割近くあるのは平成18年から刑務所内で始められた「薬物依存離脱指導」の効果があったと考える。

アメリカ人の対象者6名のうち、男性は2名、女性は4名、20歳代1名、30歳代4名、50歳代1名で、最終学歴は中等教育であった。6人とも麻薬所持の2回～15回の逮捕歴あり、ドラッグ・コート（薬物専門裁判所）でドラッグ・コートプログラムを選択し治療中または卒業した者である。両親がいる者1人、他5人は母親に育てられていた。使用薬物はメサンフェタミン、コカイン、マリファナ、スピード、クラックであった。薬物の使用期間は5年～22年、平均約12.7年であった。

2) 薬物依存症者のライフヒストリーからライフストーリーへ

(1)日本人

28名のインタビュー内容を分析した結果、471のコードが得られ、内容の類似性に従い整理し、生い立ち、薬と出会う前<病気の前兆>、薬との出会い<薬物依存症の始まり>、薬を使い続けた日々<進行する薬物依存症>、刑務所かダルクか<治療の場>、家族の回復<回復の糸口>、ターニングポイント<病気と向かい合う>、回復

し続けているとき<リハビリの積み重ね>、新しい生き方<再生のとき>の回復の過程をライフストーリーへと構成できた。

生い立ち

生まれ育った状態や環境、こころの痛み、生きつらさを語った者が多かった。

<こころの痛み、生きつらさ>

「中学校の時に同級生の人にいじめられたというか、殴られたりした時があるんですね、まあそういう事もあって学校もイヤでしたね」

「お父さんはいつ怒り出すか分からない、いつドツキ出すか分からないですから常に僕は父親の顔色をうかがって生活していました」

薬と出会う前 <病気の前兆>

薬物依存症も前駆症状を伴う病気の前兆が明らかに見られていた。

<ゆがんだ人間関係>

「不良の先輩、暴走族に入っているような先輩とかと遊ぶようになっていました」

「オートバイの盗み方も教わったし、車も盗んだし、そういう友達ばかり多かったです」

<依存症の始まり>

「小学校6年生位からお酒とタバコを始めて夜遊びをして、タバコも次第にはまっていて、タバコは止めませんでした」

薬との出会い<薬物依存症のはじまり>

こころの痛み、生きつらさをもった子供たちは、居場所を求め、友人との関係を保ち、物質や行為の依存によって、心身の安定をはかっていたが、ある時に薬物と出会い、薬物依存症という病気を発症していった。

<好奇心で薬を使った>

「友達がシンナーを教えてくれて、アルコールも同じ様にずうっと飲んでいたので、シンナーとか大麻とかMDMAとかLSDとかマッシュルームとかチョコとかいろいろ、好奇心があって、いろんな薬物とか使っていました」

<この人と別れたくない>

「シンナーは周りではやっていて、断るとグループから切られると思って、断らなかった」

薬を使い続けた日々 < 進行する薬物依存症 >

薬物を好奇心や断れなくて使っていた者は、やがて薬物を摂取したい欲求が高まり薬物依存症という病気は進行していった。

< 進行していく病気 >

「給料もらったら直ぐに覚せい剤を買いに行き、覚せい剤を使いながら仕事していました」

「女房と離婚して、子供とも別れた時に薬の連続使用が始まっていました」

刑務所かダルクか < 治療の場 >

薬物依存症が進行し無力感をもった者は自分の行くべき場所を探し始めていた。

< 刑務所か >

「今度は重い量刑で4年半の判決。逮捕された時は物凄くわずらわしい問題がいっぱいあり、金の事と女性の事とか、そういう事でも薬をやっていると、なかなか同じ事を繰り返してしまう、自分でどうにもならないんです」

< ダルクか >

「一週間だったか解毒入院して、その足で退院と同時にダルクにつながりました」

家族の回復 < 回復の糸口 >

親は子供の薬物問題を世間から隠した。

「世間体なのか15歳で親がマンションを借り、『このマンションで薬を使いなさい』と言われたのです。全然見知らない少女、薬物依存症とかいっぱい集まってくるのです」

病気と気づいた親たちは家族会で勉強を始め子供に関わらない実践を始めた。

ターニングポイント < 病気と向かい合う >

ここでは病気と向かい合い対処行動を取り始めた時期とした。

< 正直に話せる場がある >

「ここでは『薬使いたいです。自殺願望が出ています』とはっきり言えます。今までは言える場所がなかったのです。ミーティングを使って言えるようになり、薬が止まりました」

回復し続けているとき < リハビリの積み重ね >

慢性疾患は最期まで回復過程をたどる。宮里勝政は、薬物使用が止まることは、回復の“ゴール”ではなく、薬物使用が止まったところから回復が始まると強調している。

< 1日1日の治療の継続 >

「ミーティングではやっぱり時々気づかされるのは自分の問題は薬だけじゃなかったんだという事ですね」

「薬を使わないでも喜べることに気づいた」

新しい生き方 < 再生のとき >

今日1日薬を使わない積み重ねをしている薬物依存症者は新しい生き方をしていた。

< 役割を与えられ、取り組める >

「その生活という物自体が段々と楽しくなってきました。ダルクの中で役割がいろいろあり、その中で意欲的に取り組めてきました」

「震災が起きて3週間目にボランティア行きました。炊き出しなどをしてすごく喜ばれました。何となく怖さとかの共感ができました」

(2) アメリカ人

6名のインタビュー内容を分析した結果、57のコードが得られ、内容の類似性に従い整理し、生き立ち、家族との関係、薬との出会い < 薬物依存症の始まり >、逮捕されたとき、カウンセラーとの出会い < 回復の糸口 >、変化、治療を続けることが回復、とライフストーリーへ構成できた。

生き立ち

生まれ育った状態や環境に関すること、こころの痛み、生きつらさを語られた。

< 両親の離婚、再婚 >

「最初はお母さんがお父さんと別れた時、お母さんが新しい彼氏を作った時、それはすごく大きかったです。痛い気持ちでした、悲しい、怒っていた気持ちです」

< 義父からの性的虐待 >

「義父は性的虐待を持つ妹の父でした。私は5歳から9歳まで性的虐待をされました」

家族との関係

家族との関係は、5名は義父からの性的虐待、

転居、ギャングに入るなど幼少期から思春期にかけて家族との関係は順調ではなかった。

< 家から追い出された >

「最初は麻薬を売り始めて、15歳の時マリファナを使い始めました。18歳の時泥棒で逮捕され、家から追い出され、友達と一緒に住み始めました」

< 性的虐待を誰にも言えなかった >

「義父から性的虐待を受けていて、義父は『お母さんに言ったらお母さんは倒れるよ』と脅かされ、9歳のときにお母さんに言ったら、お母さんは本当にてんかんで倒れました」

薬との出会い

生きつらさをもった子供たちは、居場所を求め、ゆがんだ人間関係をもっていたある時に薬物との出会いがあった。

< 自由になって使い始めた >

「私が15歳の時母親は健康状態が良くなり退院してきました。私は自由になれたという気持ちで自由に遊び始めその時から私は家から逃げて車を盗み始め麻薬が始まりました」

< 友達と同じ経験をしたい >

「15歳から薬を使い始めたのは、友達と同じ経験をしたかったからです。単純な気持ちです。遊びで吸ってのが毎日になりました」

逮捕されたとき

調査した6名全員が逮捕されていた。

< 7~8回逮捕されている >

「2010年までは7回か8回まで捕まりました」

< 車の窃盗、売春、薬で逮捕 >

「15歳の時に車を盗んで、17歳の時に売春と車を盗んだ履歴と麻薬の逮捕がありました」

カウンセラーとの出会い

度重なる逮捕から、ドラッグ・コート（薬物専門裁判所）に送られ、ドラッグ・コートプログラムを選択した彼らは回復の機会となるカウンセラーとの出会いがあった。

< 妊娠していて、女性ハウスでの応援 >

「拘置所に入った時は妊娠2か月、裁判官に『女性ハウスに子どもが生まれるまでいな

さい』と言われて今の治療施設のプログラムに入りました。治療施設のプログラムは非常によくできています。自分の正直さがリハビリの早さに関係しています。自分に嘘をつかない、現実的に自分を見るのが重要なと思います。その正直さで、カウンセラーも周りの人たちも応援してくれたのです」

変化

プログラムの参加は彼らに変化をもたらし、変化を実感し生きる自信を獲得していた。

< 自分1人でないとわかった >

「自分が1人でないという気持ちがドラッグ・コートと治療施設にきてわかりました」

< プログラムで自分が変化した >

「治療施設に通って前向きになって話すのも怖くない、カウンセラーに自由に話せます」

治療を続けることが回復

約1年でプログラムが終了すると、卒業でき犯罪歴は抹消される。プログラムの終了後もNAやトリートメント・センターに通うことが回復し続けるものと確信していた。

< 卒業しても、NAに行く >

「自分はクリーンになって卒業します。他の人たちには、ここを卒業してもNAで会えます。1日、1日の積み重ねです。NAは続けます、責任もあるので」

< 成果の出る体験が私を支える >

「ドラッグ・コートを卒業すれば4つの犯罪歴は消されます。自分の履歴に残ってもいいと思っていましたが、今は履歴に残したくないです。自分の人生をもう一度立ち直りさせたい」

3) まとめと課題

ライフストーリーを総括すると、5つの過程が存在していた。病気に発症や寛解、再発があるように、薬物依存症の軌跡にも必ず、前兆期、発症・急性期、回復期（不安定期、ターニングポイント、安定期、社会復帰期）、終末期、再生の段階が存在した。すべての段階は順序良く迎えるのではなく、重複したり後戻りしたりしながら回復に至る。

回復期における治療継続は、病気の認識を深め病気への対処法を学び再使用を予防できる。薬物依存症者は、対人関係、経済的問題、住居の問題、就労の問題など様々な精神的・身体的・社会的な障害を抱えているため、医療、福祉機関、自助グループ、家族会、職場などの多職種の協力と連携により回復を支える。多機関の連携、啓蒙活動等は薬物依存対策に貢献できるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

五十嵐愛子、松下年子、薬物依存症からの『回復』 - アメリカ合衆国カリフォルニア州のドラッグコート視察より第1回わが国における薬物依存症の歴史と現状、精神科看護、精神看護出版、査読有、2012年、39巻7号、46 - 51 .

五十嵐愛子、松下年子、薬物依存症からの『回復』 - アメリカ合衆国カリフォルニア州のドラッグコート視察より第2回カリフォルニア州の薬物依存症者に対する処遇、精神科看護、精神看護出版、査読有、2012年、39巻8号、58 - 67 .

五十嵐愛子、松下年子、薬物依存症からの『回復』 - アメリカ合衆国カリフォルニア州のドラッグコート視察より第3回カリフォルニア州の薬物依存症トリートメント・センター、精神科看護、精神看護出版、査読有、2012年、39巻9号、56 - 63 .

松下年子、五十嵐愛子、薬物依存症からの『回復』 - アメリカ合衆国カリフォルニア州のドラッグコート視察より最終回マトリックス・アディクション治療施設とマトリックスモデル、精神科看護、精神看護出版、査読有、2012年、39巻10号、57 - 64 .

五十嵐愛子、薬物依存症を抱える家族の適応過程に関する研究、高崎健康福祉大学大学院健康福祉学研究科保健福祉学専攻博士後期課程博士(保健福祉学)学位申請論文、査読有、2013年、1-100 .

五十嵐愛子、篠原百合子、田中光子、性的虐待を受けた被虐待者の性的逸脱行動、薬物依存症からの回復、日本「性とこころ」関連問題学会誌、査読有、2013年、5(2)、165-171 .

松下年子、五十嵐愛子、田中光子、鈴木智子、米国カリフォルニア州のドラッグコートなどアディクション関連機関の視察報告、アディクション看護、査読有、2013年、10(1) p.8-18 .

〔学会発表〕(計5件)

五十嵐愛子、薬物依存症を抱える家族の適応過程 - 家族の当事者活動をフィールドとして探る -、第10回日本アディクション看護学会学術集会、2011年10月、茨城 .

五十嵐愛子、松下年子、薬物依存症者の回復支援に看護がいかにかわるのか - 米国のドラッグ・コートおよび支援プログラムを視察して -、第37回日本精神科看護学術集会、2012年6月、兵庫 .

五十嵐愛子、篠原百合子、山口恵、秋田ダルク、物質関連障害をもつリカバリーとの連携による回復支援、第19回日本精神科看護学術集会専門、2012年9月、秋田 .

五十嵐愛子、篠原百合子、田中光子、性的虐待を受けた被虐待者の性的逸脱行動、薬物依存症からの回復、第5回日本「性とこころ」関連問題学会学術大会、2013年6月、東京 .

五十嵐愛子、篠原百合子、薬物依存症からの回復 - 米国在住の薬物依存症者を対象としたインタビュー調査より -、第12回日本アディクション看護学会学術大会、2013年9月、埼玉 .

6. 研究組織

(1)研究代表者

五十嵐 愛子 (IGARASHI, Aiko)
創価大学・看護学部看護学科・教授
研究者番号：70334852

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし